



”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援

●貧しい国々での医療活動を支援

●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



片岡球子 「青富士」1977年、海外と文化を交流する会から豪州に寄贈した25点の1点。  
——1905年～2008年。北海道札幌市出身。女子美術専門学校(現・女子美術大学)卒業。  
卒業後は小学校教師をしながら創作を続ける。画家志望に反対する両親から勘当を受けながら画業を進めるが帝展(現・日展)には3度落選。1930年、第17回日本美術院展(「院展」)に「枇杷」で初入選。1933年院展にも入選するがその後何回も落選、「落選の神様」と呼ばれた時期もあった。しかし1939年、第26回院展に「緑陰」が入選し院友に推挙され以後は毎回入選。1955年、女子美術大学日本画科専任講師。1960年に助教授、1965年教授。1966年に開校した愛知県立芸術大学日本画科主任教授、1973年客員教授。型破りな構成、大胆な色使いで創作を続け、従来の日本画の概念を揺るがすような力強い表現を確立。「面構(つらがまえ)」「富士山」シリーズ」では特に高い評価を受ける。1976年、勲三等瑞宝章。1982年、日本芸術院会員、1986年、文化功労者。1989年に文化勲章。100歳を迎え脳梗塞に倒れ療養に努めながら現役を続けていたが、2008年に急性心不全のため103歳没。叙従三位。

# 随筆・寄稿

## ■ 恩師の展覧会——松岡朝さんの力

北條正庸 日本画家・海外と文化を交流する会会員

2010年6月、恩師の展覧会が練馬区立美術館で開催され、久しぶりの西武池袋線で中村橋へ。すっかり沿線の様子が変わったその風景をボーと眺めながら、三つ先の石神井公園に住んでおられたもうひとりの恩師塩出英雄先生のお宅を訪れたことを急に思い出した。不思議な気持ちであったがさして気にもとめずに美術館に向かった。

すばらしい作品に感動したが、この作品展を楽しみにしておられた恩師は、開催直前に亡くなられ、遺作展になった。作品の前に、言い知れない寂しい想いで立ちつくした。去りがたい思いで作品から離れ、芳名帳に名を印しながら、何気なく過去の図録集を見ると、再び塩出英雄先生の名が目止まった。偶然なのだろうか。図録を手にしてページをめくると画暦の欄に「帝国ホテルにて、アラン・ドロンと会う。右 塩出、左 奥村土牛」と記され、あの塩出先生がアラン・ドロンとのショットの中で少々緊張した面持ちであった。

それまで思い描いていた塩出先生の人となりとアラン・ドロンとのショットが全くと言っていいほど結びつかなかったほど微笑ましい写真であった。

さらに同欄の画暦に、会報に報告すべき文面が記述されていた。1977年(昭和52年)「この年オーストラリア巡回記念『現代巨匠二十五人展』が日本橋三越で開催され[池苑](前年作)陳列される。同作はメルボルン市ナショナル ギャラリーの所蔵となる」先生が65歳の時、また、66歳の時[鞆の浮き](4月海外と文化を交流する会展)と作家にとって大切な画暦として記述されていた。作品はオーストラリア・メルボルン市 ナショナル ギャラリーの所蔵となり現在に至るはずであったが、作品は所在不明になり忘れられた。長い年月が過ぎ、2010年7月現在、そのすべての作品はメルボルンの地で静かに呼吸している。塩出先生が記述したとおりに～。

今、この会が責任を持ってこの作品群を足がかりとして松岡朝さんの遺志を継ぐべき運命を強く感じる。それは、塩出英雄という画家が心血を注いで描いた作品は失われることが無かった。そしてもうひとりの恩師麻田鷹司先生も二十五名の作家のおひとりである。その作品もメルボルンにある。

練馬美術館での作品 毛利武彦先生の作品に導かれ、塩出英雄先生の偉大な画暦に出会い、松岡朝さんの壮大な理想に作品を託した先生たちの心を知ることになった。中村橋の不思議な気持ちは、恩師の天からの声を聞いたからか……。

## ■オーストラリア生活の中で絵画に触れ……そしてこの会にご縁があるまで

角谷昌子（社）海外と文化を交流する会企画委員

主人の赴任に伴い5年弱、パースとシドニー2ヶ所に、中学卒業式を済ませたばかりの末息子と共に渡豪致しました。

最初の2年半は、大自然に恵まれた地、かの有名な兼高かおるさんが言っていた“世界一美しい都市”パースで、高校生の息子を抱えての学校生活中心の生活でした。息子の親友の現地高校生の青年はコンピューターグラフィックを駆使し、優秀学生として大学入学を得ました。

オーストラリアは歴史の新しい国ですが、西豪州パースでは、高校までの教育課程にコンピュータを取り入れ、小学生の段階から主要教科に限らず芸術科目にまでパソコンを使い、その進歩的な教育体制に、親子共々驚き、慣れるまでに時間を要しました。

また、日本と西豪州とのご縁は、1960年代から始まった日本への鉄鉱石輸出に始まり、経済関係が親密になり、西豪州の経済に多大なる貢献をして来ました。その影響とだけとは言えませんが、高校の第二外国語に日本語とイタリア語が指定されています。息子の第二外国語修履科目に日本語があり、英語の現地高校に通学していた息子ばかりでなく、見守る親もホッとして温かい元気をもらいました。

パースはオーストラリアの主要都市の中でも、中心的なシドニー、メルボルン等からは距離的にも文化水準的にも遠く、2年半後にシドニー転勤となり、心の故郷パースを離れ難かったのですが、私の絵画を通しての芸術関与には大きな転機となりました。

シドニーでは、友人がニューサウスウェールズアートギャラリーの日本人向けの通訳をボランティアでしており、その紹介でアートギャラリーの会員になりました。数々の展示を開催前にゆっくりと鑑賞したり、会員専用の部屋で過去の展示絵画の資料、作者別の膨大な写真入りの製本等を、カフェの軽食と無料の温かい珈琲を飲みながら緑に囲まれた庭園の中で楽しみました。

ここには、マーガレット・プレストン (Margaret Preston) という女流画家 (1875~1963) の絵が何点も収められており、この人は日本画の手法に影響を受け、日本でも展示会をした事のある作者です。初期の頃は油絵も描きますが 1925 年位から日本画の隈取技法に影響を受け、1932 年作 *The Bridge from North Shore* は、シドニーの橋と湾の木版画の作品で、絵葉書にもなっており、人気の高い作品です。この作品は木版画で墨を使いグワッシュ画法で薄いクリーム色の和紙の上に手書きで描かれています。

思わぬ親日画家との時を経ての出会いに、遠い距離の日本とオーストラリアの温かい交流に胸を締め付けられる想いが致しました。

このように日本とオーストラリアは経済、文化、教育等と数え上げればきりが無い程の繋がりがありました。

そして帰国後子育てから手が離れ、今迄の子供達の成長の中で、沢山の方々に様々な形でお心を頂き今があると感じ、今度はお返しがしたいと思っている時に、主人の父方の叔母から一本の電話をいただき、この会の活動について伺い、お誘いを受けてとても感銘を受けました。

こうしてご縁を頂き、以前の豪州での生活の一端を振り返らせて頂く機会をいただいた事は本当に有難いことでした。これからも微力ですが、この会を通して日本と海外と

の交流にお役に立たせていただければと思います。

## ■2010 年度会員懇親会の報告と新入り会員のたわごと

伊能祥子 (社)海外と文化を交流する会企画委員

5月29日3時から、「海外と文化を交流する会」の懇親会が銀座教会で開催され、16人が参加した。最初に理事会が開かれ、その後総会になり、その流れのままパーティにうつった。司会は大谷理事で、ギッシュ会長からオーストラリア訪問の報告が日本画に関する円卓会議の記録を配布してなされ、鮫島理事からもA4大のカラーコピー8枚の配布で訪問の雰囲気伝える報告がなされた。その後メインスピーカーの北條正庸画伯(多摩美大日本画家教授)の日本画についての興味深いお話を伺った。日本画壇というと華やかなイメージがあるが、美大の日本画科を専攻する学生は高校まで日本画の勉強をしたことはなく、美大に入学してはじめて日本画に取り組むという。洋画との違いは岩絵の具を使うことで、海外でも日本画に興味を持つ人々が多いそうだ。北條画伯にいくつかの質問がなされたのち、出席者の何人かからひとことずつご意見を伺った。しかし時間切れになってしまい、お話を伺えない方たちも多かったのは残念であった。

私は松岡理事から懇親会担当を仰せつかったとき、これは普段ご意見を伺えない会員の方たちが集まって、親睦を深め、あわせてこの活動に積極的にかかわっていくきっかけ、エネルギーが出てくればよいなと思って引き受けた。それにはこの集いをどういう風にしたらいかなどと思案していたが、私に課せられたのは懇親会の食事や飲み物の手配、セッティングなのだとわかった。そこで松岡さんに指示された5、6人の方たちにお電話で連絡し、それぞれ手分けして買物をお願いし、当日協力しながら会場の準備をした。みなさん快く引き受けてくださり、それらの女性会員の方たちとお話ししながら仕事ができただことは楽しかった。しかし、その方たちと会の活動に関する話し合いは全くできず、残念だった。特に私たち準備係は座っている方達に食べ物や飲み物をサービスする側になってしまったため、話し合いの内容よりその仕事のほうに気持ちがいったような気がした。この懇親パーティで、出席された方たちが楽しんでくださったかどうかわからない。懇親会が会議の延長のようになってしまい、お互いの懇親を深め、この会の活動に対して気持ちを合わせていくという目的を達成できたかどうか心もとない気がする。

「海外と文化を交流する会」は今後の方針をオーストラリア、ニュージーランドと日本画を通しての文化交流を図ることと決めた。このような小さな団体がこのようにはっきりした目標をたてることはすっきりしていいのかもしれないし、数あるボランティア団体の中で特色を打ち出していくという意味ではいいのかもしれない。しかし、一方排他的になるのではないかと思う。つまり、この会にもう少し広い意味での文化交流を期待している人達を排除することになる。さらにこの明快な目標にむかう情熱、すなわち日本画に対する情熱、オーストラリアやニュージーランドに対する情熱がないとむずかしい。

私はこの会の会員になって2年位しかたっていないのでまだ会の状況をはっきりつかんで

いるわけではない。しかし創始者、松岡朝氏の偉大な功績の継承を掲げるこの会が、過去の始末だけに追われているのは息が詰まるような気がする。会員としてはやはり会の発展のためには先を見据えたい。勿論、今回のギッシュ会長、鮫島理事の訪豪の成果、共通の理解を双方で確認しあったことは評価している。ただ里帰り展の話題が出てくると、正直これは何の会なのかと思ってしまう。寄贈した絵にとらわれすぎて一歩も先へ進めないようでは気が滅入ってくる。今後の具体的な活動として日本画を勉強したいという留学生を受け入れようということ、ギッシュ会長がオーストラリアとの会議で提案された。それに対して、オーストラリア側は愛知の美大と提携関係にあるので、そちらに協力してほしいと述べたという。今のところ、こちらではどのように第一歩を踏み出すのか、果たして needs があるか、また、こちらに十分な体力があるか等々、調査と話し合いが必要であろう。北條先生のお話をうかがっていると、むしろ日本画家をあちらに送り、ワークショップを開くというのもいいのではないかと思った。

このように何かをやりたいと思っても、実際にはどこから手をつけていいかわからず、なんとなく手探り状態が続いており、そんなもどかしい気分から抜けられないでいる。

## ■伊能祥子さんの文章についての追記

松岡裕子（社）海外と文化を交流する会専務理事

会報の原稿校正役を引き受けている立場上、伊能さんの原稿を拝読いたしました。良いご意見を書いてくださいましたので、反省出来ました。ただ、会員から誤解を招くといけなこともあるので、追記させていただきます。

「つどい」に関しては本当に担当の方々のご負担ばかりが大きく、親睦、話し合いに参加出来なかったことなど反省します。

①話し合いの時間と、②セルフ・サービスおよび食べる時間を分けでもしない限り両立は無理ですね。

「活動」に関しては42年間の歴史の間にはいろいろな試みをしてまいりました。10人居れば十色のご意見、ご希望があります。偏ってはいけなと云うので、少数ながらも間口広くいろいろな活動をしてまいりました。

ところが、「絞らないと何をしている会なのか目標が見えてこない。人に聞かれても一言で説明できない会だ」と長いこと言われ続けました。

ひところは「文化を通して社会奉仕をする会」とも言いました。それでも見えないと云われ続け、私共は悩みました。

漸く最近になり整理ができて会の原点でもある日本文化啓蒙に落ち着いたわけで、これからは会の目標が鮮明になり説明もし易くなると、苦渋の模索を経験した者たちは、漸くほっとした心境になったわけです。ただし、会を貫いている精神は、この会は……日本を愛し、日本の将来のよからんことを願う気持ちの方なら、老若男女、年齢を問わずどなたでも参画できる……ということでしょうか。限られた人数ではありますが、それぞれのタレントを発揮していただくことができ、これまで歩むことが出来ました。

これからも各会員が日本文化の啓蒙のほか、会員が取り組みたい活動ができるように考え、実行していきたいと思っています。

どうぞ今後ともいろいろお教えくださり、ご協力願えましたら幸いです。

## ■母と娘 浴衣での2ショットから

松岡恒太郎 (社) 海外と文化を交流する会理事

### 品川の ecute での出来事

前から浴衣の母と娘の2ショット お子さんは小学校高学年か（一瞬だからかすかな記憶）。どこかで花火大会があるのか、はたまた浴衣でのお買い物だったのか。その光景があまりにも新鮮で、まぶしくて、息をのみました。（ちょっと大げさですが）

同時に、こういう光景を機会は少ないですが、日常として感じる事ができる日本という国を一段と好きになりました。（がっくりくることも多いですが）…… 何で良かったの～？という声も聞こえてきそうですが、あまり多くを語りたくはないですな～。一言で言うと“仲むつまじさ”です。

話は変わりますが、太宰 治の“きりぎりす”の中の「黄金風景」を読んだことはありますか？ たったの6ページですが、すこぶる良い文章です。太宰作品は好きになれないという方でもご一読後は、気持ちに変化が現れるかも。そんな内容です。

故太田静子さんと太宰氏との間に女兒である太田治子さんがおられますが、治子さんも、「最も好きな文章だ」と言っていました。（それで読んでみたわけですが）  
「黄金風景」の結びには、

.....

負けた。これは、いいことだ。そうでなければ、いけないのだ。  
かれらの勝利は、また私の明日の出発にも、  
光をあたえる。

.....

で締めくくられています。素晴らしいエンディングなんですけど、太宰氏は主人公がある光景を見て、感じたことを描写して見せています。

今日の親娘の光景も、一方は文字から読み取ることしか出来ないが、身近な日常の光景から、文字が言わんとすることに近い印象として受け止めることができた、と感じました。

ということで、ここに「黄金風景」をご紹介します。

よかったら是非ご一読を。既に読んだ方には、わたしの気持ちがわかっていただけたかな～と。

1歳の息子が太宰作品に遭遇するのは、いつの日やら……。

## 収支計算書および事業計画

ことし5月に理事会で承認された平成21(2009)年度の収支計算書および平成22(2010)年度の事業計画を掲載いたします。

### 平成21(2009)年度 収支計算書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

科 目	予 算	決 算	増 減	
I 事業活動収支の部				
事業活動収入				
① 会員会費	500,000	485,000	▲ 15,000	
正会員会費	450,000	485,000	35,000	内95000円は預かり金
賛助会員会費	50,000	0	▲ 50,000	
② 補助金	50,000	30,000	▲ 20,000	
補助金	0	0	0	
寄付金	50,000	30,000	▲ 20,000	
③ 事業収入	1,640,000	676,810	▲ 963,190	
つどい	320,000	0	▲ 320,000	
国際交流	0	0	0	
留学生	0	0	0	
会報	0	0	0	
講演・音楽	1,320,000	676,810	▲ 643,190	
東京ハルモニア室内楽団支援	0	0	0	
その他	0	0	0	
④ 雑収入	500	1,095	595	資産収入他
事業活動収入計	2,190,500	1,192,905	▲ 997,595	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出	2,966,000	1,215,858	▲ 1,750,142	
つどい	520,000	0	▲ 520,000	
国際交流事業	1,500,000	770,920	▲ 729,080	郷州ベルボルンでの調印式 への派遣旅費2名分
留学生奨励金	400,000	0	▲ 400,000	
会報発行	146,000	0	▲ 146,000	
講演会・音楽会	400,000	444,938	44,938	
東京ハルモニア室内楽団支援	0	0	0	
その他	0	0	0	
② 管理費支出	820,000	602,950	▲ 217,050	
法人住民税	70,000	70,000	0	
役員報酬支出	0	0	0	
諸謝金支出	230,000	167,341	▲ 62,659	
会議費支出	50,000	67,060	17,060	
交通費支出	80,000	18,160	▲ 61,840	

通信費支出	100,000	97,531	▲ 2,469	
事務所費支出	240,000	132,201	▲ 107,799	
家賃	0	0	0	
水道光熱費	20,000	20,000	0	
図書・印刷費	10,000	0	▲ 10,000	
消耗品費	60,000	54,231	▲ 5,769	
H.P 維持費	150,000	57,970	▲ 92,030	ホームページ刷新
雑支出	50,000	50,657	657	登記印誌代、監査費
<b>事業活動支出計</b>	<b>3,786,000</b>	<b>1,818,808</b>	<b>▲ 1,967,192</b>	
<b>事業活動収支差額</b>	<b>▲ 1,595,500</b>	<b>▲ 625,903</b>	<b>969,597</b>	
Ⅱ 引当金	1,400,000	1,000,000	▲ 400,000	オセアニア美術家招聘基金
Ⅲ 予備費支出	50,000	0	▲ 50,000	
<b>当期収支差額</b>	<b>▲ 3,045,500</b>	<b>▲ 1,625,903</b>	<b>1,419,597</b>	
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>4,016,930</b>	<b>4,016,930</b>	<b>0</b>	
<b>次期繰越収支差額</b>	<b>971,430</b>	<b>2,391,027</b>	<b>1,419,597</b>	

#### オセアニア美術家招聘基金

	予 算	決 算	増 減	備 考
2010 年度積立	1,400,000	1,000,000	▲ 400,000	

#### 平成 22 (2010) 年度事業計画

1. 訪豪帰朝報告会の開催（定款 4 条 6 項による）  
オーストラリア国民へ寄贈した日本が 25 点の今後の管理運営、展示方法および日豪美術交流等について Arts Victoria および National Gallery of Victoria と討論する為、3 月 27 日からメルボルンに赴いた Gish 会長と鮫島理事による帰朝報告会として、20～30 名の茶話会を開き意見交換をして今後について話し合う。
2. 日豪交流における招聘計画（定款 4 条 2 項による）  
メルボルンから美術教師あるいは美術学生の招聘を計画する。短期間日本の美術に関して学んでもらう。
3. “つどい”（定款 4 条 2 項による）  
会員相互の親睦会を兼ねての講演会を開催する。講演内容としてオーストラリアおよびニュージーランドに寄贈した日本画についての解説および日本美術全般などに関して会員・会友が学ぶ機会としたい。
4. チャリティ・コンサート（定款 4 条 6 項による）



水谷川優子チェロ・コンサートを予定。

5. 一般社団法人の認定申請書作成。
6. 会報発行（定款4条6項による）  
会員との交流、情報交換を図るため、年間3～4回発行。
7. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援（定款4条6項による）  
演奏のみによらず、種々の文化活動に於いても高く評価されている団体であると認め、その演奏活動に協力する。

以上

## お知らせ&報告

### ■コンサートのお知らせ

2011年の「海外と文化を交流する会チャリティコンサート」は、チェリスト水谷川優子さんを企画しています。企画がまとまった時点でホームページおよび会報でお知らせいたします。ご期待ください。

### ■「つどい」企画中

海外と文化を交流する会ジョージ・ギッシュ会長と鮫島宗明理事が、30年前に豪州に寄贈した25点の絵画についての管理と今後の豪州との関係を豪州ヴィクトリア州芸術省と打ち合わせるために、2010年3月に訪豪しました。その訪豪報告会と、北條正庸画伯による日本画についての講演を6月、東京・銀座教会にて懇親会というかたちでおこないました。今後、会員が懇親できる「つどい」を開いていきたいと考えています。

### ■会員の募集

海外と文化を交流する会は、すでに42周年をすぎました。ここまで、ずっと続いてきたのは、会員の皆さまのバックアップがあるからです。御礼申し上げます。会としてさらにボランティアでの有意義な活動をしていきたい、そんな願いをこめて、常に企画を検討しています。幸いに良質な会員の方々ばかりです。さらなる発展を期待し、新会員をご推薦ください。自薦の場合でも、理事会で面接いたします。事務局までファクスあるいはe-mailでお問い合わせください。

## ■会費納入のお願い

2009年度の年会費納入をお願いいたします。さらに2008年度2007年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会  
銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000円（正会員） 5,000円（特別賛助会員） 3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局  
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内  
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org  
<http://www.kaigai-bunka.org>